

わらべうた (4) なべなべそーこぬけ



小泉文雄著「日本傳統音楽の研究 1」(昭和 48 年第 8 刷)での分類によれば、核音を 1 つしか持たない「エング(狭いという意味)・メロディー型」(p.129)。その中で 3 音旋律の (1) 長 2 度+長 2 度、終止音は真ん中の音、に分類される (p.109)。

子供の頃、2 人で遊んだ経験のある方が多いと思われるが、大人数で遊ぶことも出来る。

●2人が向かい合って両手をつなぎ、歌に合わせてつないだ両手を左右に振り、最後の「かえりましょう」で手をつないだまま背中合わせにひっくり返る。もう一度両手を左右に振りながら歌い、最後の「かえりましょう」で元の向かい合わせに戻る。

●2人以上何人でもで遊べる。輪になって隣の人と両方の手をつなぎ、歌に合わせて中、外、中、外、と繋いだ手を振り、最後の「かえりましょう」で、リーダー格の人が先導して、他の人がつないだ手と手の間を目指しくぐり、順々に全員がくぐり、最後に全員が背中合わせの輪になる。もう一度歌い、中、外、中、外、と繋いだ手を振り、「かえりましょう」で、リーダー格の人が、他の人がつないだ手と手の間を目指し、後ろ向きにお尻からくぐり、順々に全員がくぐり、最後に元の前向きの輪に戻る。大人数で遊ぶと、くぐり抜ける時のスリル感、時にスピード感も出て、大変面白い。大人数の場合、大きい子やまた大人でも楽しめる。

第10回 西方音楽祭 2025年春

◇3月23日(日) 14:30 ～ オープニングコンサート

宇都宮短期大学音楽科の優秀な学生によるコンサート (第 130 回)

亀田 初音 (研究科 1 年): ピアノ 種倉 菜夏 (短大 2 年生): クラリネット

森 聖夏 (短大 2 年生): ソプラノ

上野 なのは (短大 2 年生): ピアノ伴奏 益子 徹 (教員): ピアノ伴奏



西方音楽祭、毎年楽しみにしているのは、オープニングコンサートです。何年か前のコンサートを初めて拝聴した時、他のコンサートでは味わえないフレッシュさと、素直さ、若い方が一生懸命音楽と向き合っている姿に、すっかり魅了されてしまったのです。今年は宇都宮短期大学音楽科学生によるコンサート、ソプラノ独唱、クラリネット独奏、ピアノ独奏でした。皆さん落ち着いて曲目の紹介をして下さり、親しみのある名曲の数々を演奏して下さいました。中でも春にちなんだ曲も多く、季節とあいまって春を満喫できるようなプログラムでした。コンサート終了後は、思わず笑みがこぼれるような、素敵なとても気持ちの良い時間になりました。また来年も楽しみにしています。是非多くの方に足を運んでいただきたいと思います。(会員: 田中 澄江)

◇3月29日(土) 11:00 ～ 12:00 お花見わらべうた フルート奏者金田 桃子を迎えて

金田 桃子: フルート 中新井 紀子: わらべうた、チェンバロ、フォルテピアノ、ピアノ

2 歳の娘と参加しました。歌に合わせて歌ったり遊んだり、中新井先生がチェンバロなどを弾いているところを見たり聴いたり、他の親御さんとおしゃべりしたりして過ごしました。緊張しいの娘ですが、和やかな雰囲気すぐに慣れて楽しんでおり、あっという間に時間が経っていました。

帰ってから娘に感想を聞くと「おうたたのしかった～」「うめとさくら、またいこうね」と笑顔で話していました。わらべうた特有の言葉の言い回しや節、リズムは、大人も楽しくて日常でもつい口ずさみたくなるものばかりです。また、抱っこやおんぶをして全力で遊ぶのは家に一对一でいるとなかなかできない触れ合いの機会だなと感じました。

近くに稲安食堂や西方の道の駅があり、帰りに昼食を食べて帰るのも、娘にとっては楽しみの一つようです。次回も参加できたらと思います。(元生徒: 金子 陽)

◇4月5日(土) 12:00 ～ 14:00 リレーコンサート

今回の参加者は 5 名で、小学生の男の子は、チェンバロでバッハの有名なプレリユード、ショパンのノクターン 2 番を、メロディを情緒たっぷりに演奏され、音の伸びやかさは素晴らしかったです。

常連の、毎年超絶技巧の曲を披露されるイケメンなお兄さんは、ラフマニノフのプレリユード、ショパンのバラード 3 番を、繊細で大胆で自由な迫力ある演奏でした。私は家族 3 人で参加しました。主人のヴィオラ、私のピアノ伴奏で、坂本龍一のラストエンペラーの演奏は、ヴィオラの音色が木洩れ陽ホールに優しく包まれて、きれいに響いたようです。ヴィオラの演奏会もぜひ今度あると嬉しいです。

息子は、ヨルシカ作曲「だから僕は音楽を辞めた」をピアノ演奏しました。辞めないでねと母は温かく見守っております。

私はショパンのソナタ 3 番 4 楽章を、緊張しながらも、最後まで無事弾きました。支えて下さった皆様に感謝です！また参加して頑張りたいです。(会員: 小杉 恵子)

◇3月30日(日) 15:30 ～ 春を告げるコンサート (第 131 回)

若松 夏美 (ヴァイオリン) & 菅野 潤 (ワルターモデルフォルテピアノ)

若松夏美さんのヴァイオリンと菅野潤さんのフォルテピアノ。息の合ったお二人の魅力的な演奏に、モーツァルトの時代のサロンに思いをはせながら聞き入りました。

優雅に春の訪れを感じさせるモーツァルトのソナタ、フォルテピアノのソロは春の憂いを含み美しく。初めて耳にするボッケリーノの「ラ・ティランナ・スパニョーラ」は踊りたくなるようなスペイン風の軽快なリズムに乗せて春の喜びを歌い、そしてベートーベンソナタ「春」はまさに春爛漫の景色の中に身を置いてうっとり。心地よい風が体の中を吹きわたっていきました。春の訪れを確かに感じた素敵なコンサートでした。(会員: 雨宮 美知子)



◇4月6日(日) 15:30～ ヴィオラ・ダ・ガンバとリュートで巡るヨーロッパの旅 (第132回)

福澤 宏 (ヴィオラ・ダ・ガンバ) & 野入 志津子 (リュート)



内容の濃いプログラムだった。16 世紀から 18 世紀にかけて、イタリア、イギリス、フランス、ドイツ、ボヘミアなど様々な地域で作られた曲の数々……。まさに時空を超えた音楽の旅だった。私にとって初めての曲ばかりだったが、それぞれが変化に富み、魅力に溢れていた。ガンバ奏者の福澤宏さんとアーチリュート奏者の野入志津子さん、お二人の息もぴったり合い、繊細なリュートの音色は心の壁に深く入り込み、渋く、それでいて豊かなガンバの音は、空気だけでなく床からも振動が伝わってくるかのようだった。どちらも、楽器がご自分の身体の一部であるかのように大事そうに抱えて演奏する姿が印象的だった。

はるか遠い昔の学生時代、レスピーギの『リュートのための古風な舞曲とアリア』を聞き、リュートという楽器の存在を知って以来、ぜひ生のリュートを聞いてみたいと思っていた。それがついに実現した。また、これまで通奏低音で聞くことの多かったガンバの無伴奏曲も、今回聞くことができた。「ヴァイオリンは人を活気づけ、ヴィオラは人の心を落ち着かせる」という言葉を読んだことがあるが、その通りだと実感した。

芸術は、時代とともに形態や嗜好が変化しても、進歩するという性質のものではないと、改めて感じた。一度は舞台から姿を消しかけた楽器たちの音色を、小さな音が美しく響く木洩れ陽ホールで堪能できたことに感謝しつつ、その余韻に浸りながら、家路についた。(会員: 篠原 玲子)

◇4月13日(日) 15:30～ クラリネットとピアノで奏でるフランスのエスプリ(第 133)

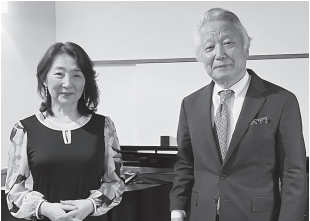
武田 忠善 クラリネット 堀江 真理子 ピアノ

私のかつてクラリネットの師は、オランダで勉強をされていらして、師の奏でる音楽は、どことなく土の香りがするような音楽でしたが、それに比べ、お二人の演奏は、実に洗練され都会的な音楽でした。

オープニングは、ドビュッシーのラブソディー第 1 番、ピアノの美しい、おそらくピアノシモから始まり (譜面が行方不明)、クラリネットに引き継がれ、このコンサートへの期待感を掻き立ててくれ、フランスらしい色彩豊かで、クラリネットの持つ深い音色と、確かなテクニクに、終始引き込まれておりました。

ピアノソロの、フォーレの「舟歌」、ラベルの「水の戯れ」は、モネの絵画を見てるような、情景が浮かぶ実に美しい演奏に心地よさと癒しをいただきました。

御年 7 2 歳という武田氏ですが、全く年齢的な衰えとは無縁のエネルギーで、かつ熟成された大人の演奏をお聴かせいただき、沢山のエネルギーをいただいて帰ってきました。豊かな音楽には力がある事を改めて感じた音楽会でした。(会員: 山村 多恵子)



◇4月19日(土) 15:30～ 国際古楽コンクール<山梨>入賞記念コンサート(第 134回)

ロドリゴ・ベリオ チェンバロリサイタル



今年は、2024 年の第 35 回国際古楽コンクールの鍵盤楽器部門で (第一位なしの) 第二位を受賞されたベリオさんに来て頂くことができました。ベリオさんは、2004 年にスペインでお生まれになった (とても若い!!)。8 歳 からキーボードに触れ、10 歳からチェンバロとフォルテピアノを演奏され、2023 年にブルージュで開催されたムジカ・アンティカ・コンクールでファイナリスト、2024 年には山梨の後、ミラノのチェンバロ・コンクールで第三位、と今後がとても 楽しみな好青年です。

リサイタルは、ラブレッシュ・チェンバロを使用 (横田誠三さん 2020 年製作でモデルはクロード・ラブレッシュ 1699 年製作)。豊かでふくよかなクーブランの響きが木洩れ陽ホールに拡がりっていきます。シアワセ〜フランス風序曲が始まりびっくりと感動が押し寄せてきました。この曲は幾つかの CD 演奏を聴いたことがあったのですが、ベリオさんの飾り付けがすごい。ピタリと嵌まっている装飾に「そう来たか!」、「そうだ!」、「ひえ〜そうするのか。すごい」などと心の中で快哉を叫びながら聞き掘れてしまいました。実はその後の休憩の時に若干 20 歳であることを知り、二重に感動してしまいました。音楽に「若いのに」という先入観を持つてはいけませんが、いやしかし、若いのに (コラッ!) すごい! 休憩を挟んで、再びクーブラン、バッハ、最後はヴィヴァルディのバイオリン協奏曲のベリオさん編曲版、と盛り沢山の豪華メニューでした。アンコールにも 10 分 近い大曲。それも物凄い力技の…。ありがとうございました。おな一杯!!

コンサート後、出口でベリオさんにご挨拶したら、なんとベリオさんは日本語がペラペラ。15 歳の時から独学で日本語を勉強されたそうで、スペインでは平家物語 や小野小町のレビューを書いているという……物凄く多彩なお方でした。なお、当日の第 1 曲 (クーブラン: 第 13 オルドルより) は YouTube で見る & 聴くことができます。「西方 ベリオ」で検索すると出てきます。(会員: 谷 伸)